V-6　石巻市釜谷地区釜谷集落　　2012 年 12 月 17 日（月）

報告者名　岡山　卓矢　　被調査者生年　① 1925 年（女）
調査者名　岡山　卓矢　　被調査者属性　①釜谷住民（V-4 話者①の母、V-10 話者①）
補助調査者　土佐美菜実

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　生年未確認（女）、話者①の息子の妻（V-4 話者②、V-10 話者②）

嫁いだ頃の話

昔の嫁は囲炉裏の木尻に座るものである。息子の嫁は、今日で 4 日目だが雄勝で養殖用の貝殻のなんだかの仕事へ出ている。昔の嫁は余計なことは何も話せないものだったが、今の時代は嫁を大事にしなければいけない。話者①が嫁に来た頃は、4 歳違いと 30 歳違いのオバもいた。離婚して出戻り居ついた人達である。大正 15 年（昭和元年）生まれの話者①は、釜谷の北西、飯野川の外れにある馬鞍出身で、23 歳のとき 4 つ年上の夫と結婚した。夫が無くなって今年で 16 年になる。話者①の縁談をまとめたお仲人さんは親類の男の人だった。ただし式では夫婦揃って仲人を務めてもらう。あそこの家にこういう女の子がいるから、とこちらの家に持ちかけたそうだ。どういう人が仲人をすると決まっているわけでないが、わけのわからない人では出来ず、誰もが務められるものでもない。

話者①は 40 歳から 60 歳頃まで、バイクで電報配達の仕事をしていた。夫は田と、電力会社の集金・検針の職についていた。この仕事が月に 20 日ほど勤務があるため出稼ぎもしなかった。電報の仕事は、元は舅が釜谷の大川郵便局でその仕事をしていて、夜の部を手伝い始めたのがきっかけで引き継いだ。舅は昭和 30 年頃から 60 歳頃に体を悪くし辞めるまで配達の仕事をした。始めたのは嫁に来て少しした頃からである。電話を買う以前は、局が家のすぐ側だったので直接局の人がやっきて電報の依頼をされた。

また元は姑が少し養蚕をしていたそうだが、嫁いでくる直前に姑が亡くなりそれも辞めたそうだ。何軒か養蚕をしていた家はあったようだが、釜谷には桑畑が少なかったので、あまり家数も量も多くなかったようだ。

生業について

話者①の家は田を 10 枚持っていた。耕地整理によって 1 枚は 1 反である。1 反から 3 俵くらい収穫した。多いところで、受託含め 14～5 枚作る家もある。ただし話者①が嫁に来た頃は 8 反かそれ以下だった。震災前は息子も石巻へ勤めていたので田はやらず、部落の人へ全面委託していた。元々田を多く作っていた家が昭和 50 年頃から機械を導入していくと、委託が集ってくる形でこうなった。大体 1 軒が 10 軒近くの田を受託する割合である。こちらは 10 俵くらい米で貰い、話者①宅で食べるのと身近な親戚数軒へ 1 俵ずつやるのに充分だった。残りは委託先の人が供出する。他の家では米でなく金でもらうところもあった。今は田は無くなったが、二又や大谷地の知り合いが皆米をくれ、食べきれないほどなので石巻の知り合いへ分けている。以前北海道旅行に行った時、こんな広さをどう作るんだと驚いたが、当時は珍しかった機械化をしていたのだった。話者①の家はずっと夫が田をしたが、釜谷では夫が次第に会社勤めするようになると妻が農業をする家が多かった。野菜は家で食べる分程度しか作らなかったが、麦は作っていた。皆田はあっても畑は無いというのが多く、あとからの分家は田も無いので米は買って食べていた。また次三男は元は家に居ついて手伝いをしたのだが、昭和 12、3 年頃からよく兵隊へ行くようになり、体が弱い人だけが田をやるような時代になった。復員後は釜谷を出て勤める人が多かった。話者①の家は 2、

3か所に山を持っているが、今はどうなっているやら。材木として、あるいは炭にして売ったが、夫はあまり山をしなかったものの、釜谷にはほとんど山が専門のようにして稼ぐような家も3、4軒あった。

またキドリといって倒木から鉈で焚物を取ることを、秋から春の農家仕事の無い時期にした。女もよくしたが、力が無いので枝打ち程度の太さのものだけである。この時期にしょっちゅうリヤカーで取ってきたり、石巻へ行った帰りに取って背負って帰ってくるなど、何度も何度もかけて取るので、1年の総量がどのくらいになったか分からない。生木は燃えにくいので山へしばらく置いて乾燥させ、これを数束ずつ持って帰るのである。

昭和30年代に舟を購入し、夫とウナギ採りをした。ウナギ採りは1人では出来ず、木枝を沈めておいて夫がそれを引き上げ、話者①がその下をタモで掬って枝に入り込んだウナギを捕った。釜谷の域の分でしか漁は出来ないが、多い時期で10軒ほどは漁業権を取っていた。いい風が吹いてるからウナギが捕れるぞとよく夫が言ったが、本当によく捕れる。また何故かお祭りの朝にもよく捕れたもので、湯のみ茶碗ほどの太さの大物含め20本捕れた時もある。

昭和30年頃までは馬を飼う人が多かった。田打ちで使うためで、話者①の家は飼わずに1反いくらで馬を飼う家に頼んで作業してもらっていた。牛を飼う人もいたが、牛は作業するには馬より面倒が多い。秋に米を売った金を残しておき、働いてもらうとそこから支払をした。

釜谷について

釜谷には昨年中2〜3回訪れたが、今年は行っていない。毎日拝みに行く人もいるそうだが、自分は行くのが嫌である。家の隣が学校だったので、子供達のことを思い出して涙が出る。

釜谷は大川の中心地で、酒屋2軒・雑貨屋4軒・魚屋1軒などがあった。大川中が釜谷で買物をしたが、後に各部落にも商店が出来た。以前はバスも通っていたが料金が高く、舟を使うか、飯野川からトラックの乗り合いをすることもよくあった。

釜谷の昔の写真を持っていた人がいて、それを釜谷から避難した家々に焼き増しして配ってくれたものを飾っている。また以前に初午をテレビが撮っていた映像がDVDになって市販されており、これを借りた。こうしたものがあって良かった。

話者②による話

雨が降ると外仕事は出来ないため、よく近所のお爺さんがお茶飲みに集ってきたもので、話者②はよく昔話を聞かされた。一杯やると話が始まるもので、雨降りは楽しかった思い出がある。どこそこの爺さんのあだ名は正直者の○○さんとか、その由来はといった話で、そういうことが無くなった今になって寂しく思う。うなぎの蒲焼をあつかんに入れて飲むという飲み方を教えられたが、あれはとんでもないおいしさである。うなぎの蒲焼は家でも作ったが、釜谷の西の入口付近にあったモガミ屋旅館は幻の鰻屋とも呼ばれる名店で、偉い人が来た時もここなら連れて行けるような美味い店だった。

写真1　昔の釜谷の写真

写真2　昔の初午の映像を観て

正月は干した魚の出汁をよく使った。カジカ（ハゼ）を雑煮の出汁、またオゲ（ウグイ）を焼いてとろろの出汁にした。雑煮は碗からはみ出してそのカジカも盛り付け、上にイクラを散らすものだった。震災前は鮭の漁業権を持っていたおじに年末に鮭を頂いていたし、漁協からも安く買えたのだが、今年は高いからやめたところ娘がえらくショックを受けていた。なお人によってはとろろはボラやヘラブナの出汁が好きな人もいる。